

古事記における世界間移動

飛内 紳

I. はじめに

古事記上巻には葦原中国、高天原、黄泉国など様々な世界が登場する。それらの世界の一つと、そことは異なる世界の間に関係が生じる時に、古事記では事件が起きている。イザナキが葦原中国から黄泉国を訪れる黄泉国訪問や、スサノヲが葦原中国から高天原に赴く高天原来訪、オホクニヌシが葦原中国から根之堅州国に行く根之堅州国訪問などが、その例である。

そうした事件は、古事記の後の展開に大きな影響を与えている。例えば、イザナキは黄泉国から戻ってきてから三貴神を生む。この時生まれたアマテラスとスサノヲはその後の展開に重要な役割を持つ神となる。スサノヲとアマテラスがウケヒをした時に生まれたアメノオシホミミは、天孫降臨をするホノニギの親となる。根之堅州国から帰ってきたオホクニヌシが葦原中国を支配することは、後の天孫降臨への布石となる。これらのことから古事記では世界と世界の間に関係が生じることは、古事記において重要なことであると考えられる。

こうした事例を見ていくと、そこに一つの共通点を見つけることができる。それは世界と世界の間に関係が生じる時には、多くの場合、その二つの世界の間を神が移動しているということである。神の移動は世界の関係性を変化させたり、後に大きな役割を担う神の誕生と契機となっている。

本稿はこれらの共通点に注目、世界から世界へと神が移動する行為に焦点をおいて古事記を分析、それにより世界と世界がどのようにつながっているかを論じるものである。世界と世界の間を神が移動する行為のことを、世界間移動と呼ぶこととする。

移動は複数の神話において重要な役割を担っている。そのため、移動に焦点を絞り複数の神話を一つの視点から捉えることは、古事記の神話が複数集まり織りなしている総体的な関連性を見る視点を与えてくれる。世界と世界がどのようにつながっているのか、その関係をうまく捉えることができれば、古事記上巻の神話的な部分、ひいては古事記全体の本質をより理解できるようになり、読みを深めることにつながるだろう。

具体的には、神が世界間を移動する事例を調べ抽出しまとめて図として表し、それを分析することで新たな知見を探る手法をとる。世界をこれまでとは異なった方法で捉えることにより、世界同士の関係性を新しい観点から見つめ直すのが、この手法をとる狙いである。図を使うのは、より変化がわかりやすい視点で世界の間関係を見るためである。古事記では神がある世界から他の世界へと移動することが、世界間関係を変化させる原因となっている。移動と同時にその移動によって引き起こされる世界間関係の変化も把握するために、神が世界間を移動する行為に焦点を合わせて、世界間のつながりを考察するのである。

図では、世界と世界の間につながりがあるかどうかは、移動の有無によって表す。神が世界Aと世界Bの間を移動していれば、その二つの世界の間移動によってつながりができたものとなり、移動がなければ二つの世界の間につながりはないことになる。例えば、高天原と葦原中国の間を移動している神は多く存在する。そのため高天原と葦原中国の間にはつながりがあることとなる。逆に高天原と黄泉国の間を移動した神はいない。よって高天原と黄泉国の間には直接のつながりがないものとして図では表される。世界のつながりについての研究の代表的な説である三層構

造説は世界のある位置を世界間の関係性を決める基準としている。それに対し、この図では神が移動したかどうかを基準とするわけである。

Ⅱ. 先行研究

世界がどのように関係しあっているかは重大な問題であり、それに関する先行研究の数も多い。世界同士のつながりを正確に捉えることは、古事記の宇宙観を理解することにつながるからである。神話としての古事記の読みを深めるうえで、宇宙観の把握は大きな手がかりとなる。

前述したように。世界の関係についての先行研究でもっとも代表的なものは三層構造説である。これは西郷信綱が『古事記の世界』の中で古事記世界を、高天原を上、葦原中国を中、黄泉国を下とする、上中下の垂直的な三重層として捉えた説である。¹ また、それ以前にも、倉野憲司は『古典と上代精神』の中で、高天原・葦原中国・黄泉国がトリオをなしている世界であり、葦原中国の中国という名称はこれら三つの世界がトリオをなした時に生じたものとする説を提示している。² 世界の関係についての議論では、三層構造説に関係するものが、肯定も否定も含めて、中心的な位置を占めている。

佐藤正英は「黄泉の国の在りか」で、黄泉国は葦原中国の下にあるものではなく、上にあるものだとする観点から三層構造説の上中下の分け方を批判している。³

神野志隆光は『古事記の世界観』において、葦原中国を機軸とする関係が複数、積み重ねられて古事記の世界関係をつくっていると捉えている。⁴ 別次元の関係である、高天原と葦原中国の関係と、葦原中国と黄泉国／葦原中国と根

之堅州国／葦原中国と海宮の關係を無媒介につなげているとして、三層構造説を批判している。また、上中下の下として黄泉国の位置づけがなされているが、黄泉国を地下世界と認めることはできないとも批判している。

西條勉は『古事記と王家の系譜学』において、三層構造は民族信仰ではなく、新たに王家のテキストにおいて形成された神話世界であると考察している。垂直的な高天原系を基本的な枠組みとし、そこに水平的な根国系を組み入れたことにより、古事記の世界の關係が成り立っていったと論じている。⁵⁾

このように世界の關係の問題には様々な説がある。しかし、ある面から見た場合。行き詰まりを見せているとも言える。上中下、垂直構造、平面構造、どちらが上でどちらが下か、地上世界であるのか地下世界であるのか、論じることの中心が世界の位置關係の問題になっているからである。

どのような位置關係で、世界同士がつながっているのかを捉えることは、もちろん大きな問題である。古事記の世界がどのようにイメージされていたかを考えるうえで重要だからである。しかし、古事記の世界全体の關係がどのようになっているかを多角的に考えるためには、世界の位置による關係づけ以外にも目を向けるべきである。位置關係を世界關係の中心的な問題にすることの大きな弱点は、その方法では世界同士の關係が動的に変化していくさまを捉えられない点にある。

古事記において、世界と世界のつながりは固定されてはいない。その關係は、神話の中で変化していく。例えば、葦原中国と黄泉国の間の平坂が塞がれているのは黄泉国を訪れていたイザナキが塞いだからであるし、葦原中国と海宮の間の海坂が塞がれているのはホヤリのもとを去ったトヨタミビメが塞いだからである。

それに対して、三層構造説のような位置を重視する視点で捉えているのは、世界の關係が変化していく物語が終わり、關係が固まった後のつながりである。そのため、世界間のつながりがダイナミックに変化していくさまを捉える

ことができていない。こうした視点は、ある一時点での世界像を切り取って把握するには有用だが、そうなるに至った経緯やそれ以後どのように世界間の関係が動いていくかを見て取ることができないという弱点がある。本稿は世界関係の変化の契機となる世界間移動に着目することで、動的な変化を捉える試みを行う。

移動と世界についてを論じた先行研究としては、毛利正守の「古事記に観る神話の世界」がある。⁽⁶⁾これは作品論という立場から、アマテラスを中心に葦原中国とそれを取り巻く国々の関係について論じたものである。アマテラスと世界の関係には、アマテラスの子孫が様々な世界の力を得て繋がっていく、鏡を葦原中国に降ろす、アマテラス自身が高天原に座し続けるという三つの流れが存在すると論じ、アマテラスを中心とした世界の関係を「古事記に於ける神話の世界像」という図を示している。⁽⁷⁾神の移動を重要視し、それを図として示すという手法を使っている点で、本稿と近い性質を持っている。大きな違いは、本稿の図は世界と世界の関係を捉えることを中心にしているが、「古事記に於ける神話の世界像」の図はアマテラスと世界の関係を捉えることが中心となっている点である。

移動に焦点を絞り複数の神話の一つの視点から捉えることで、個々の神話同士の間を論じる先行研究としては、都倉義孝の『古事記 古代王権の語りと仕組み』、⁽⁸⁾吉田敦彦の『日本神話の特色』がある。⁽⁹⁾前者はヤマトタケルとスサノヲの移動に共通する特徴についての研究であり、後者は他界訪問譚の類似についての研究である。

語られている神話をまとめて分析することにより、古事記に通底して存在するパターンを探った先行研究としてはフランソワ・マセの『古事記神話の構造』がある。⁽¹⁰⁾

Ⅲ. 移動の事例の図表化

図表は以下の手順で作成した。まず古事記上巻から、神が世界の間を移動をしている事例を集める。次にそれらの移動がどの世界からどの世界への移動であるかを物語毎に整理する。物語毎とするのは、移動に区切りをつけずに混ぜてしまうと、古事記内での前後がわからなくなり、世界への変化が捉えられなくなるからである。

集める事例は、神がある「世界」から、そことは異なる「世界」へと位置をかえる行為とした。「世界」とは「神話的に区切られた領域」のことで、具体的には葦原中国、高天原、黄泉国、根之堅州国、海宮、常世国が異なった「世界」となる。そのような異なった世界の間を移動する行為を「世界間移動」とする。そのため高天原内だけで行われるアマテラスの岩戸隠れやタケミナカタの諏訪への逃亡などの移動は、同世界内の移動と考え「世界間移動」として取り扱わない。また、日向や出雲、オノゴロ島などは総称として葦原中国と呼ぶことにするが、区別しておく必要があるため「葦原中国（○○）」と表記した。

図表1 世界間移動の事例

番号	事例	出発地点	到着地点
01	イザナキ・イザナミの降下	高天原	葦原中国（オノゴロ島）
02	イザナキ・イザナミが神生み失敗の原因を聞きに高天原に戻る	葦原中国（オノゴロ島）	高天原

03	イザナキ・イザナミ、再度降下	高天原	(オノゴロ島)
04	イザナキの黄泉国訪問	葦原中国	
05	イザナキの帰還	黄泉国	(日向)
06	スサノヲの高天原訪問	葦原中国(日向)	
07	スサノヲの追放	高天原	(出雲)
08	オホクニヌシの根之堅州国訪問	葦原中国(出雲)	
09	スセリビメを連れてのオホクニヌシの帰還	根之堅州国	(出雲)
10	アメノホヒの降下	高天原	(出雲)
11	アメワカヒコの降下	高天原	(出雲)
12	ナキメの降下	高天原	(出雲)
13	アマツクニタマとその妻子の降下	高天原	(出雲)
14	タケミカヅチとアメノトリフネの降下	高天原	(出雲)
15	タケミカヅチの帰還	葦原中国(出雲)	
16	天孫降臨によるホノニギ、アメノコヤネ、フトダマ、アメノウズメ、イシコリドメ、タマノオヤ、オモヒカネ、タヂカラヲ、アメノイハトワケ、アメノオシヒ、アマツクメの降下	高天原	葦原国(日向)

17	ホヲリ ¹ の海宮訪問	葦原中国（日向）	海宮
18	ヒトヒロワニに送られてのホヲリ ¹ の帰還	海宮	葦原中国（日向）
19	トヨタマビメの来訪	海宮	葦原中国（日向）
20	トヨタマビメの帰還	葦原中国（日向）	海宮
21	タマヨリビメの来訪	海宮	葦原中国（日向）

集める対象は、移動前・移動中・移動後の三つの描写が揃って存在する、世界間移動であることがはっきりとして
いる事例のみとした。扱う対象を制限したのは、描写が少なく判断が難しい移動も含めて、解釈の揺れが生まれ不安
定なものとなってしまうのではないかと考えたからである。よって今回は確実に世界間移動と考えられる移動を対象
とすることにした。

移動前の描写がないので対象から外したのは、出雲にやってくるスクナビコナの移動、出雲にやってくるオホモノ
ヌシの移動である。移動中の描写がないので対象から外したのは、イザナミの黄泉国への移動、スサノヲの根之堅州
国への移動である。移動後の描写がないので対象から外したのは、スクナビコナやミケヌの常世国への移動、イナヒ
の海原への移動である。常世国、妣国、海原に関しては「神話的に区切られた領域」である可能性は高いと思われ
るが、これらの理由からそうした世界への移動は対象外とした。

上巻に多数の神話的な描写と世界間移動が書かれていることから、資料が多く研究対象として適していると考え、
古事記上巻を主な資料とした。基本的に参照する資料は西宮一民の『古事記 新訂版』^[1]とした。

古事記上巻におけるこの定義にあった世界間移動を列挙し、移動の出発地点と到着地点をまとめたものが図表1で

ある。列挙してある順番は、古事記で語られている順番である。

図表2 出発した世界と到着した世界の共通点

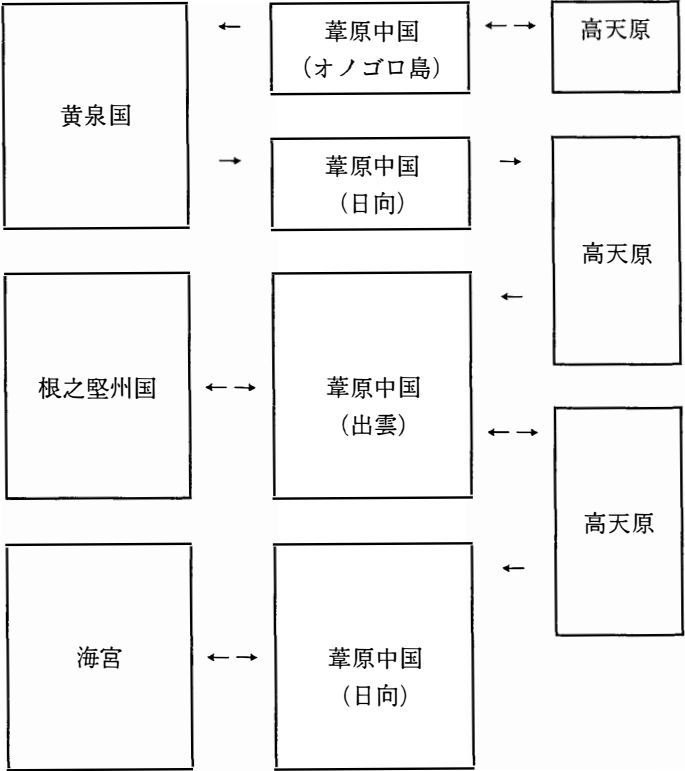
番号	移動する神	出発した世界と到着した世界
イザナキ・イザナミの国生み時の移動		
1.	イザナミ・イザナキ	高天原 ↓ オノゴロ島
2.	イザナミ・イザナキ	高天原 ↑ オノゴロ島
3.	イザナミ・イザナキ	高天原 ↓ オノゴロ島
イザナキの黄泉国訪問		
4.	イザナキ	葦原中国 ↓ 黄泉国 日向 ↑ 黄泉国
5.	イザナキ	
スサノヲ 原訪問		
6.	スサノ	高天原 ↑ 日向
スサノヲの 天原追放		
7.	スサノヲ	高天原 ↓ 出雲
オホクニヌシの根之堅州国訪問時の移動		
8.	オホクニヌシ	出雲 ↓ 根之堅州国
9.	オホクニヌシ・スセリビメ	出雲 ↑ 根之堅州国
国譲り時の移動		
10.	アメノホヒ	高天原 ↓ 出雲

11 アメワカヒコ	高天原 ↓ 出雲
12 ナキメ	高天原 ↓ 出雲
13 オホクニタマ	高天原 ↓ 出雲
14 タケミカヅチ・アメノトリフネ	高天原 ↓ 出雲
15 タケミカヅチ	高天原 ↑ 出雲
天孫降臨	
16 天孫降臨一行	高天原 ↓ 日向
ホヲリ ホヲリ ホヲリ・ヒトヒロワニ	日向 ↓ 海宮
17 ホヲリ	日向 ↑ 海宮
18 ホヲリ・ヒトヒロワニ	日向 ↑ 海宮
19 トヨタマビメ	日向 ↓ 海宮
20 トヨタマビメ	日向 ↑ 海宮
21 タマヨリビメ	日向 ↑ 海宮

図表1の事例を、どの世界からどの世界への移動であるかを物語毎に整理したものが図表2である。物語毎としたのは、変化を視野に入れるためである。出発世界と到着世界が同じあるいは逆の移動すべてをまとめてしまうと、はじめの方の物語での移動も途中での移動も後の方の物語での移動も同じになってしまう。そうなると古事記内の展開の進み方が図の中で表せなくなり、変化が捉えられなくなってしまうからである。

図表2で整理した移動をまとめることで、古事記上巻全体での世界と世界のつながりを図へとおこしたものが図表3の世界間蛇行線状図である。まとめたのは、出発世界と到着世界が同じ移動と、その逆となっている移動である。高天原から葦原中国へと降りる移動と、葦原中国から高天原に昇る移動はまとめて扱っている。

図表 3 世界間移動蛇行線状図



どちらの世界への移動なのかは矢印で表した。世界間の矢印が一つのものは一方向への移動、つまりその世界間での移動が、矢印の方向へのものしかないことを表す。例えばスサノヲが葦原中国から高天原へ行く際の移動は一方向への移動なので「葦原中国↓高天原」となる。矢印が二つ左右にあるものは、その世界間での移動の向きが二方向あることを表す。例えばイザナキとイザナミは、まず高天原から葦原中国へと降り、その後また高天原に昇り、そしてまた葦原中国へと降りている。この場合は、高天原と葦原中国間で二方向への移動があるので「高天原↑↓葦原中国」となる。

IV. 周期性と葦原中国

図表3の世界間移動蛇行線状図からわかることは、移動していく世界の順番に周期性があることである。この周期は図の中で三回繰り返されている。整理すると以下のようにまとめることができる。

1. 高天原と葦原中国の間の移動。
2. 葦原中国から黄泉国・根之堅州国・海宮のいずれかへの移動。
3. 黄泉国・根之堅州国・海宮のいずれかから、葦原中国へ戻ってくる移動。
4. 葦原中国と高天原の間の移動

これを古事記上巻の具体的な移動と対応する形に書くと、以下のようなになる。

第一周期 高天原 \uparrow ↓葦原中国（オノゴロ島）↓黄泉国↓葦原中国（日向）↓高天原
 第二周期 高天原↓葦原中国（出雲）↓根之堅州国↓葦原中国（出雲） \uparrow ↓高天原
 第三周期 高天原↓葦原中国（日向）↓海宮 \uparrow ↓葦原中国（日向）

この三つの周期は、移動の方向が異なっていること、それぞれの周期において葦原中国のうちのどこに移動するか
 が異なっていること、三回目の移動で葦原中国と関係づけられる世界が黄泉国・根之堅州国・海宮と異なっているこ
 と、第三周期では高天原に戻らないといった違いはあるが、それ以外の点では共通している。この共通している部分
 をまとめると以下のような周期として表すことができる。

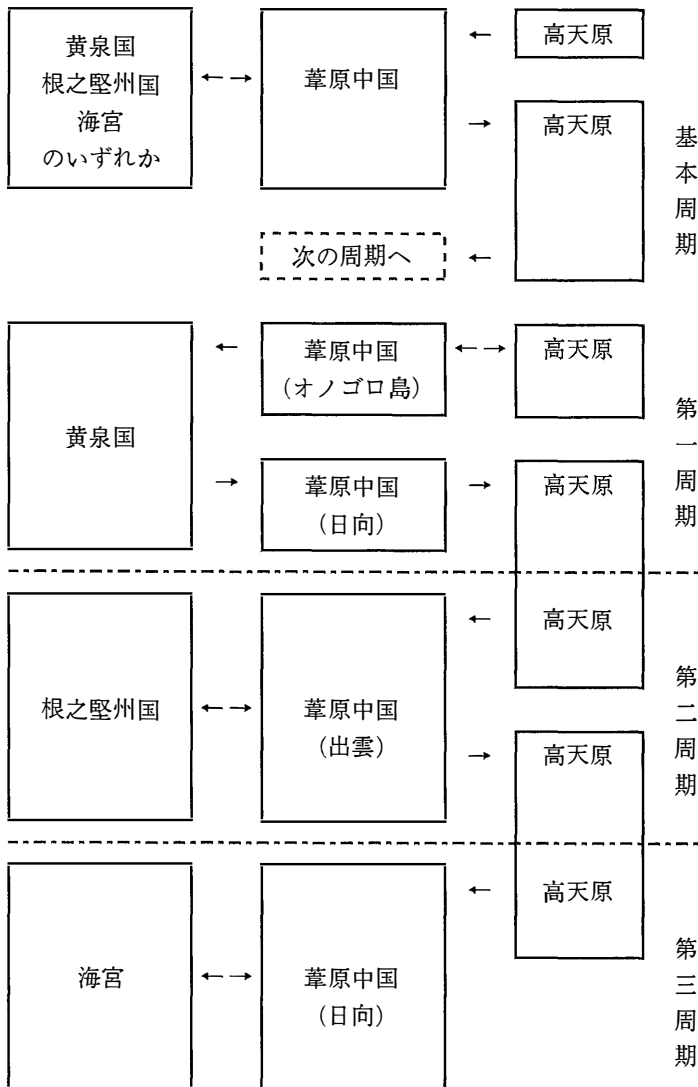
基本周期 高天原↓葦原中国↓高天原↓（次の周期の葦原中国）
 \leftarrow
 \rightarrow

〔黄泉国・根之堅州国・海宮のいずれか〕

この周期を図にまとめたのが、図表4である。これを基本周期と呼ぶこととする。上にあるのが図として表した基
 本周期、その下にあるのが、第一周期・第二周期・第三周期を世界間移動蛇行線状図をあてはめたものである。

二つの世界間移動蛇行線状図を見てわかることがもう一つある。それは葦原中国が世界間移動の中心的な場所とな
 っていることである。

図表 4 周期つき世界間移動蛇行線状図



世界間移動の出発世界から到着世界を見ると、葦原中国が常に関わっていることを見て取ることができる。葦原中国以外の世界、即ち高天原・黄泉国・根之堅州国・海宮が関連する移動は、常に葦原中国との間での移動となっているからである。古事記には複数の世界が存在し、その世界間で多くの移動が行われている。にも関わらず、葦原中国以外の世界から葦原中国以外の世界への移動は行われてはいない。具体的に言うと、高天原を出発し黄泉国へ行く移動や、根之堅州国を出発して海宮へ行くような移動は存在しない。

葦原中国以外の世界へは、葦原中国から出発しないと移動することはできない。逆に、葦原中国以外の世界から出発した場合、到着先となるのは葦原中国だけである。このことから神が世界間移動をする際、葦原中国はその中心地点としての性質を持っている世界であると考えることができる。神の移動は世界と世界のつながりに変化を起こす原因となる行為である。その神の移動の中心が葦原中国であるということは、葦原中国が古事記上巻の世界関係の変化の中心となっていると言い換えることができるだろう。葦原中国へ、あるいは葦原中国から、神が移動する、その行為によって世界間の関係は変化していつているのである。

V. おわりに

これまでとは異なった観点から、世界と世界がどのようにつながっているかの知見を得るために、神の移動に焦点をあてた図である世界間蛇行線状図をつくり、その分析を行った。その結果、二つの知見を得ることができた。

その一つ目は、古事記における世界の移動の順番には、周期的な規則性があることである。まず高天原から出雲や日向などの葦原中国のどこかへの移動が行われる。次に葦原中国から、黄泉国・根之堅州国・海宮のうちのいずれか

の世界へ行き、そしてまた葦原中国へと帰還する移動が行われる。その後、葦原中国と高天原間の移動が行われる。ここまでは一つのセットとなっている。一通りの移動が終わると、また高天原から葦原中国へと降りる移動が始まる。古事記上巻は、このセットを三回繰り返している。世界間を何度か行ったり来たりすること等の違いはあるが、移動は基本的にこの順番で行われる。

二つ目は、世界間移動には中心となる地点があり、それが葦原中国であるということである。古事記上巻には、神が世界間を移動する行為が何度も語られている。しかし、その移動には葦原中国が必ず関係している。葦原中国から出発するか、葦原中国へ到着するのである。葦原中国以外の世界から葦原中国以外の世界に至る移動は語られていない。

未解決な問題としては、具体的描写が少ないことを理由に対象から外した常世国や海原などの世界の問題がある。これらの世界は、古事記内の描写が少なく、どのように位置づけるかが難しかったからである。これらの世界をどう位置づけるかが今後の課題である。

関係図ができあがっていると、常世国や海原も図の中に位置づけることができるのではないかと考えられるようになってきた。図では関係を基準に位置づけを決めている。そのため具体的描写が少ない世界であっても、どの世界と関係しているかがわかれば、図の中で扱うことができるようになるからである。

特に常世国は世界間蛇行線状図へ組み込むことができる可能性が高いように思われる。古事記上巻で語られている常世国への移動には、オホクニヌシ帰還後の出雲から常世国へのスクナビコナの移動とホヲリ帰還後の日向から常世国へのミケヌの移動の二つがある。これらは以下のように、基本周期の同じ場所にあてはめることができる。

第二周期 高天原↓葦原中国（出雲）↑高天原↓（次の周期の葦原中国）

←→ ←

根之堅州国 常世国（スクナビコナの移動）

第三周期 高天原↓葦原中国（日向）

←→ ←

海宮 常世国（ミケヌの移動）

このことから、常世国への移動もまた周期性を持っているのではないかと考えられる。また、常世国以外の移動も周期性を持つていそうである。根之堅州国と海宮から帰還後の葦原中国が舞台の時に、海が関係する出来事が多く起こっているからである。スクナビコナが海から船に乗ってやってくる、オホモノヌシが海を照らしてやってくる、イナヒが海原に行くなどの出来事が起きている。海あるいは海原関連の移動は、本稿では世界間移動として扱わなかったが、このように共通するということは、海・海原・常世国は類似した性質を持つ領域である可能性がある。

注

（1）西郷信綱 『古事記の世界』二五～二六頁 岩波書店 一九六七年九月

（2）倉野憲司 『古典と上代精神』九六～一一九頁 至文堂 一九四二年三月

（3）佐藤正英 「黄泉の国の在りか」『現代思想』 一九八二年九月

- (4) 神野志隆光 『古事記の世界観』 吉川弘文館 一九八六年六月
- (5) 西條勉 『古事記と王家の系譜学』 六一―一〇三頁 笠間書院 二〇〇五年十一月
- (6) 毛利正守 「古事記に観る神話の世界」『神道史研究』第五四卷第二号 二〇〇六年一〇月
- (7) 同上 一三―一四頁
- (8) 都倉義孝 『古事記 古代王権の語りと仕組み』 一七二―一九三頁 有精堂出版 一九九五年八月
- (9) 吉田敦彦 『日本神話の特色』 一五九―一九一頁 青土社 一九八九年三月
- (10) フランソワ・マセ 『古事記神話の構造』 中央公論社 一九八九年五月
- (11) 西宮一民 『古事記 新訂版』 桜楓社 一九八六年十一月